HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道キリスト教史研究に関わって ： 小谷部全一郎のことども
Author(s)	福島, 恒雄
Citation	基督教学, 20, 23-37
Issue Date	1985-07-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46443
Type	article
File Information	20_23-37.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究ノート

北海道キリスト教史研究に関わって

―小谷部全一郎のことども―

福島恒雄

昨年の北海道基督教学会で「ある教育者の思想と足跡―小谷部全一郎について―」のテーマで発表する機会が与えられた。この度、学会誌の編集者より、必らずしも研究発表に拘束されず、研究ノートとして原稿を書くようにと親切なアドバイスを受けたので、テーマにそいつつも少し自由な立場で、筆者が北海道キリスト教史研究に関わってきたことについてもふれてみたい。

一九六三年に札幌の開拓伝道のため招かれて来道した時、私には一つのテーマがあった。それは、当時日本の宣教論として考えられていた。福音の土着化の問題である。日本人の生活の中に如何に福音が定着するかの問題である。意識的、知的に福音を受け入れても、生活は必らずしもともなっていない。信仰の脱落、埋没、転向が問題視されていた。福音が日本人の信仰生活の中に受肉しがたい原因の中には、歴史の浅さ、伝統慣習の根強さ、日本人のもつ宗教的心情、伝えられた内容と方法についても検討されなければならないと考えていた。

北海道にくる前は、青森県の古い歴史をもつ農村教会にいたので、古い伝統慣習の精神的しがらみのようなものを強く感じさせられていた。北海道には明治の初期からキリスト教徒開拓者たちが移住して、新しい郷土をつくっていたことを知っていた。古い伝統と慣習のないところで、キリスト教の信仰をもってどのような村をつくってきたのか、その信仰の内容がどのような共同社会を生み出してきたかを、史的検証をしたいというテーマをもっていた。

しかし、研究者として来たのではなく伝道者として来たので、時間的にはゆっくりとしたリズムを取らざるを得なかった。そのリズムの中で出会った多くの先学者に教示を受けることが出来感謝の念を深くしている。(1)

英国の著名な歴史学者トインビーは、『東から西へ――世界一周旅行記(2)――(East to West A Journey Round World by Arnold, J. Toynbee)の中で、日本は

伝統の威力がとくに強い国である。しかし、北海道はその伝統が本来の純粋な形では存在したことがなかった。その北海道で新しい日本が生れはじめたのである。という主意のことを、述べている。これは、一九五六年にトインビーが文明史観に立つあの巨大な『歴史の研究』A Study of History』を完成して、その実証と改訂を目的とし、世界の各地を訪ね、日本にも二ヵ月間滞在して歴史学者と討論し、北海道にもその足を伸ばした時のことである。この本は筆者の史的関心を強める一因ともなっている。

このように北海道キリスト教史の研究は開拓史の研究からはじめ、今も尚そのテーマを課題として持っている。他方に、アメリカの歴史学者ターナー（Frederick Jackson Turner 1861-1932）の諸論文から示唆を受けるものも多かった。

ことにターナーの『フロンティアの意義 The Frontier in American History』で提唱しているフロンティア論は、北海道開拓史を研究するものにとって学ぶ点が大きいように思われた。ターナーは一八九〇年に『歴史の意義、The Significance of History』において

「歴史は客観的であるにせよ主観的であるにせよ、常に造られつつあるのであって、けっして完成されることはない[3]」

「歴史の研究家が最初に学ばねばならない教訓は標準的な究極的な歴史があるという概念を捨てることである。当然のことながら、このような概念は不可能である。歴史は過去からわれわれに伝わってきて、現代が課することのできるすべての批判的解釈力をもって研究されたあらゆる遺産である[4]」

特にこの論文で私の目をひいたのは

「この若いアメリカにおいてさえ、古いローマは生きつづけている[5]」

という言葉である。大西洋を渡って新大陸に新しい歴史をつくってきたアメリカでさえも、古いローマが生きていることを見た著者の言葉に歴史の継承ということを改めて考えさせられた。

北海道の移住者たちも古い伝統と決別してきたはずなのに、古い慣習が新しい大地で芽をふき出しているのである。

ターナーは歴史継承に注意しながらも、「地方史は世界史の光をあてて考察されなければならない[6]」とも書いている。

ターナーのフロンティア論は、当時もその後も賛否両論の史的論争をよびおこしてきたが、フロンティアの意義の発見はアメリカ史の発見でもあったと言われる。ヨーロッパから移民して新しい社会をつくった人々は、古いヨーロッパの再現ではなかった。ヨーロッパのどこにもないアメリカ文化を生み出したそれは何かを問うたとき、ターナーはフロンティアのもつ歴史的意義を発見したのである。そして、アメリカの民主主義はフロンティアの中から生れてきたと述べている。

「フロンティアの最も重要な影響は、合衆国とヨーロッパにおける民主主義の増進にあった。すでに示したように、フロンティアは個人主義を産み出す。フロンティアの個人主義は初めから民主主義を促進してきたのである。[7]

政治史や経済史よりも自然的・地理的環境論が重視されていると批判されているが、筆者が注目したのは次の文である。

「われわれは、アメリカの開拓地においていかにしてヨーロッパの生活が新大陸に入り込んだか、いかにしてアメリカがその生活を変更し、発展させ、ヨーロッパに反作用したかを観察しなければならない[8]」

と述べ、イタリアの経済学者ロリア(Loria Analis)の言葉を引用している。

「アメリカは、ヨーロッパが何世紀ものあいだ、探し求めて失敗に終った歴史のなぞをとく鍵を持っており、長い歴史を持たないその土地が世界の歴史の歩んだ道を明らかに示す[9]」

アメリカとヨーロッパの関係と、本州と北海道との関係を単純に類比することはできないが、多分に相似性をもっている。

先住民族の居住する土地に開拓者が移住としてきたこと、古い伝統を新しい世界に移しつつ新しい歴史をつくってきたこと、キリスト教史的に視れば、ピューリタンの信仰を受け継ぎながら、信仰の自由を求めて移住してきた群があったことなどである。

筆者が北海道キリスト教史研究の視点としてきたのは、日本キリスト教史との関連性であるよりは、その相違性であった。それを追求することにより、北海道キリスト教史の性格が明らかになると共に、ターナーが言う如く、地方史の特徴を掘り下げることにより、全体史が豊かなものとなり、全体史を問うことによって地方史に光がさしてくるものと思われる。

これからの研究によってその特徴は、加えられ訂正さ

れてゆくものと思われるが、北海道キリスト教史の特徴として筆者が考えているのは以下の七項である。

一、キリシタン時代の北海道移住
二、ハリストス正教会の伝道開始
三、札幌バンドの発生
四、開始期に於ける宣教師の役割
五、アイヌ民族との信仰的な関わり
六、信仰集団による開拓者の群
七、キリスト教徒教誨師の群と働き[10]

昨年の北海道基督教学会で発表した「ある教育者の思想と足跡」は、第五項の特徴としてあげたアイヌ民族との信仰的関わりに関連することである。

小谷部全一郎は一九〇〇年（明治三三）から一九〇九年（明治四二）まで、北海道の虻田でアイヌ民族の教育につくした人である。

北海道キリスト教史を学ぶ中でアイヌ民族との関わりは史的重要な課題である。北海道の歴史は開拓の歴史であると共に、先住民族であるアイヌ民族の生存権をおびやかしてきた歴史でもある。甚しい差別と偏見と圧政の歴史でもあった。

その中にあって、キリスト者は如何に対応してきたことであろうか、信仰の中心となる隣人愛はどのように生きたか。キリスト教史の中でトータルに問われなければならない課題であろう。

アイヌ民族に、真に隣人として接しようとしたのは宣教師たちであった。和人のキリスト者で、その人格を重んじ隣人として敬愛の心をもって接したのは稀である。その中の一人に小谷部全一郎を数えることが出来よう。

筆者が小谷部に注目したのは、明治期にプロテスタントでアイヌ民族のために働いたのはその殆どが、バチェラー（Jhon Batchelor 1854-1944）を中心とした聖公会の人々であった。しかし、小谷部はバチェラーとは全く関係なく、しかも北海道ともあまり縁がなかったのに、アメリカで学位を取り、ただひたすらにアイヌ民族の教育のために渡道してきた人であったからである。

筆者が小谷部をクリスチャンと知ったのは全くの偶然からであった。歴史も一つの出会いであるといわれるが、その感を深くさせられる。和人のキリスト者でアイヌ民族の教育のために尽した人としては、永田方正[11]、永久保秀二郎[12]、三浦政治[13]等の名を文献で注目してきたが、小谷部は虻田学園の創始者として知っていてもキリスト者であることは知らなかった。たまたま、横浜の紅葉坂

教会を訪れることがあり、その八十年史を見て驚いた。小谷部はキリスト者であるだけでなく、牧師として横浜組合教会（現紅葉坂教会）の二代目牧師であったことがあると記されていた。その教会史には小谷部について多くは記していないが下記の如くである。

㈢　小谷部全一郎牧師時代

明治三十二年三月就任
明治三十二年十月辞任

小谷部牧師は十余年のアメリカにおける学窓生活を終えられ、帰朝された直後在京宣教師の推挙により来任された。しかるに在任八ヵ月にして病の故をもって辞任されたのである。[14]

しかし、その後については全く触れていない。他の組合教会史関係資料やキリスト教史関係資料にも筆者が見たものの中には殆ど見ることはできない。道内の教会史資料をみても不思議と思うほど小谷部について書かれたものはない。

ただ、一八九九年十二月に出された『北海道教育雑誌八十三号』には

「土人教育の熱心者小谷部全一郎氏の来道同時は、エール大学の出身者にして十有六年間米英諸国に歴遊し、且さに艱苦を嘗め辛楚をうけ、不撓の精神を以て、いんぢあん黒人等の諸部落に入れ遂に自ら土人学校に入り業を卒へたりと曰ふ、去月特に本道土人部落を遍歴し大いに本道土人教育の為画策する処あり、之等特殊教育には又非常なる熱心家教育者を要す、土人教育問題之より漸く高まらん吾人深く悦ふ処なり」[15]

小谷部は北海道の教育界になんらかのつながりをもっていたのであろうか。アイヌ民族の教育者として歓迎されている記事がみられる。これを見ると、すでに北海道のアイヌ部落を巡回視察していることになる。多分、横浜組合教会を辞任する前後に北海道へきたことなのであろう。

一九六三年に出された『北海道教育史、全道編㈢』[16]には虻田の旧土人教育について記し、その終りに小谷部全一郎の略歴が記されている。それによると、

小谷部は明治元年秋田に生れ、二十一年に渡米し、ヴァジニア師範学校、ワシントンのハーバート大学、コネチカット州のエール大学で哲学、神学、人類学を学び、二十八年にワシントン第一コングリゲーショナル教会で按手礼を受けている。その後、ハワイに招かれて、教会の働きと教育にたずさわり、翌年再びエール大学にもど

って哲学博士の学位を得た、とある。そして以下のように記している。

「明治三十一年二月二十五日帰朝し、横浜組合教会の牧師に就任したが、翌年退任した。そして北海道旧土人救育会の創立に奔走した……」[17]

ここには、小谷部がキリスト者であって、しかも横浜組合教会の牧師であったことが明記されている。

一九〇八年明治（四一）六月に小谷部自身の書いた履歴書が残されているが、[18]彼はキリスト者であることも、神学を学んだことも、按手礼を受け、牧師となったことも書いていない。わずかに関係社団の項に、帝国教育会会員、東京人類学会員、日本歴史地理学会員と共に、東京基督教青年会会員とある。小谷部自身が短期間で牧師を辞めたことなどあって、あまりふれたくない心境であったのかもしれない。それ故に、アイヌ民族の教育者として記されることがあっても、キリスト者として、或は牧師として記されることはなく、[19]道内の教会と関係することもなかったらしい。

ただ、後に見た虻田町史の虻田実業補習学校の項に「社団法人北海道旧土人救育会私立虻田実業補習学校の責任者で指導者である小谷部全一郎は生粋のクリスチャンであった」[20]とある。そう感じさせる生き方であったのであろう。

小谷部はアメリカでキリスト教の信仰を持ち、神学を学び按手礼を受け、帰朝して八ヵ月間牧師をし、後、虻田でアイヌ民族の教育者として十年間働き、病気のため帰京して、研究、著述の生活を送った。その略歴は、

小谷部全一郎の略歴

一八六七（慶応三）一二月二三日　秋田市に小谷部善之輔の子として生れる
一八七三～七九（M六～一二）秋田寺町小学校
一八八〇～八二（M一三～一五）東京、本郷原町要義塾に学ぶ（十三歳）
一八八二～八四（M一五～一七）父善之輔に法学を学ぶ
一八八五（M一八）シベリヤ大陸へ渡る？
一八八六～八八（M一九～二一）横浜英語学校で英学を学ぶ
一八八八（M二一・六月）神戸より渡米する
〃　（〃　九月）バージニア州ハンプトン工芸学校に学ぶ（二十一歳）（師範学校？）
一八九〇（M二三）同校卒業ワシントン市ハワード大学

入学（哲学神学）
一八九四（M二七）同校卒業コネチカット州エール大学入学（神学）
一八九五（M二八）同校よりマスターオブアーツを受ける
八月　ワシントン第一コングリゲーショナル・チャーチにて按手礼をうけるハワイ伝道会社から招かれ教育牧会に当る
一八九七（M三〇）エール大学院に入り、哲学、人類学を修む
一八九八（M三一）哲学博士を受ける　ボストンビリグリム社より「Japane Robinson Crusoe」を出版
一八九八（M三一）十二月二十五日　帰国する
一八九九（M三二）三～十月　横浜組合教会（現紅葉坂）牧師赴任
一八九九（　〃　）十一月　渡道してアイヌ部落を巡回
一九〇〇（M三三）五月　東京にて旧土人救育会を起す
一九〇一（M三四）九月　虻田第二尋常小学校設立（アイヌ学校）
一九〇二（M三五）九月　社団法人虻田学園設立（アイヌ学校）
一九〇五（M三八）五月　虻田実業補習学校設立（アイヌ学校）
一九〇六（M三九）十月　冬期夜学会を設立（アイヌ学校）
一九〇九（M四二）良友会を組織し機関紙「良友」発行
一九〇九（M四二）十一月　虻田学園を退職上京
一九二四（T一三）十一月　「成吉思汗ハ源義経也」発刊
昭和初期　国学院大学講師をする
一九二九（S四）「日本及び日本国民之起原」発刊
一九四一（S一六）三月十二日　東京品川大井元芝町八四九死去

北海道とは殆ど関係なく、その所属していた教派・組合教会（Congregational Church）の中にもアイヌ民族の伝道・教育についてふれたものが全く見られないのに、何故、小谷部はアイヌ民族の教育をその生涯の事業としたのであろうか。論じることは易しいが、実際に家族をあげて、当時、アイヌ民族の中に住み教育に当ることは、並々ならぬ決心があったものと思われる。事実、言語学者金田一京助が小谷部を知り、一夜を虻田学園に過したことを『北の人』[22]の中に記しているが、宮城女学校を出た小谷部夫人の労を思い、子供の教育に話題がふれたと

き、小谷部の目にはうっすらと涙が浮んだ事が書かれている。

何がその動機（Motive）となったのか、北海道キリスト教史を学ぶ者として注目される。

J・バチェラーは北海道に静養にきてアイヌ民族と出会い、それが生涯を決することになるが、他のアイヌ民族の教育に尽した人々も、北海道に来て何らかのめぐり会いを経験して教育の道を選んでいる。しかし、小谷部はアイヌ民族と出会う前から、その教育について深く考え、並々ならぬ決意を抱いているのである。

その動機は二つ考えられよう。

一つは、彼が十年間に及ぶアメリカ留学の時、ワシントンのハワード大学に入ったことである。北海道教育史にはハーバード大学となっているが、これは、ハワード大学（Howard University-Washington D.C 1867 創立）の誤りであるが、この大学は黒人のためにアメリカで最初にたてられた高等教育機関である。一八六三年のリンカーンによる奴隷解放宣言から四年目のことであった。小谷部は渡米して間もなくハワード大学のランケン学長の知遇を得て、一八九〇～九四年までこの大学で学んでいる。そこで彼は人種差別の問題を知り、差別を受ける側に立ってものを考える思想を身につけたことであろう。

二つには、一八九五年にエール大学で神学を学び、コングリゲーショナル・チャーチ（Congregational Church）で按手礼を受け、ハワイ伝道会社に招かれて牧師として二年間働いた時、先住民族のカナカ族の教育に関わったことがある。そこで少数民族の教育について学ぶものがあったのであろう。秋田出身の小谷部はこの時、北海道の先住民族であるアイヌ民族の教育について憂慮するところがあった。

当時、ハワイの駐在公使であった島村久や駐米公使であった星亨にアイヌ民族の教育について献言している。

高倉新一郎氏の『アイヌ政策史』には註の欄に「北海道旧土人保護法立案通過の裏面には、布畦並に米国の土人教育機関を見て深く感ずる所あり、我国に於ても是を学ばん事を当局に訴えた小谷部全一郎の献策があったと云われる」[23]と記されている。

そして、その献策の時は明治二十九年と三十一年であったらしいと書かれている。しかし、その法案の内容についてはあずかり知らなかったらしく、その後、北海道に来てアイヌ民族の教育に当ってから、何度か改訂の献言を出している。

小谷部は、一八九八年（明治三一年）十二月に帰国して、翌年三月横浜組合教会の牧師として招かれた（現日本キリスト教団紅葉坂教会）しかし、わずか八ヵ月で辞任し、翌一九〇〇年（明治三三年）五月には東京で、旧土人救育会を設立している。その趣旨書は次のようであるが、これに賛同して役員にあげられているのは、各界の有力な知名人である。青年時代に渡米して殆どが学生生活を送り、帰国して一年半しかたっていないのに、これほどの賛同者を得ていることは一驚に価する。その前年に旧土人保護法が国会で可決したことや、在米時代に知った星亨や島村久の紹介や、或は当時四回目の総理をしていた伊藤博文がエール大学の同窓生であったことも、人脈のつながりを得る要因となったかもしれない。

北海道旧土人救育會趣旨

北海道旧土人たるアイヌも日本國民の一部なり。等しく明治聖代の澤に浴し乍ら他に比して自由を得ること少きは何ぞや。他に比して幸福を享くること少きは何ぞや。或は曰ふ彼等中有識者無きにあらざるも多くは是無智の民、決して他と同等なる能はすと。或は云う彼等中勤勉家無きにあらざるも多くは是懶惰の民、決して他と并進する能はずと。彼等果して懶惰か。先進者何ぞ彼等を導かざる。彼等豊教育を受るも尚ほ覺る能はず。指導に接するも尚ほ進む能はざる者ならんや。無智懶惰の者の存するは國民の恥辱なり。無智を無智とし、懶惰を懶惰とし放棄して敢て省みる者無きも亦國民の恥辱なり。アイヌを教へよ。アイヌを導けよ。而して彼等をして他と等しく自由を得、他と等しく幸福を享けしめよ。アイヌを救育する所以、亦是日本國民の品位を高むる所以の一端なり。

アイヌ救育に志ある者茲に一會を組織し之を北海道旧土人救育會と稱す。救育とは單に貧困者に金品を與ふるの謂にあらず、單に年少者に諸學課を教ゆるの謂にあらず、窮境に陥らんとする者を救ひて之に自活の途を授けんが爲、適切の教育を施すの謂なり。依頼心を増長せしむるか如き施與と習得後應用少き學課の注入とは本會の務めて避けんとする所。本會は事業實施の第一としてアイヌ部落近接の地をトし此所に工藝、技術、農事に関する學校を起こし、アイヌをして就て學ぶの便を得せしむるとを謀るべし。主唱者の一人たる小谷部全一郎はアイヌに同情を寄すると厚きのみならず、曾て米國に學びて未開人教育の事に經あ驗り。今やアイヌの開發誘導を

以て己れの任となし自ら進んで北海道に移住し親しくしく學校を管理して救育の實を擧げんことを期せり。本會の爲さんとする事業尚ほ甚だ多し。資力の増進に應じて漸次設計する所あるべきなり。アイヌを憐み、國家を思ひ、人道を重ずる諸氏、冀くは此趣旨を贊し、應分の力を添へ本會をして思ふ所を行はしめよ。

會　則

第一條、本會の目的はアイヌを救育し、工藝、技術、農事の智識を與へ自營自活の道を教ゆるにあり。第二條本會々員を分で左の三種とす。特別會員。維持會員。通常會員。

第三條、特別會員は本會に金品を寄附し、若しくは特別の功勞ある者にして評議員會の決議により推薦したる者。第四條、維持會員は會費として毎月金五拾錢を納むる者。但一時に會費金六拾圓を前納する者は以後會費を納するを要せず。第五條、通常會員は會費として毎月金貳拾錢以上を納むる者。第六條、本會に左の役員を置く。會頭一名。幹事若干名。評議員若干名。但會頭幹事の任期は滿三ヶ年とし再撰することを得。評議員は役員會の決議により會頭之を囑托す。第七條、會頭は會務を總理す。第八條、幹事は本會一切の事務を擔任す。第九條、評議員は本會重大の事件を評決す。第十條、本會則は役員全數の三分の二以上の同意を得るにあらざれば變更することを得ず。

明治三十三年五月十日設立

役　員（イロハ順）

會　頭　公爵　二條基弘

幹　事　長谷川哲次　小谷部全一郎

加藤政之助　塚本道遠

坪井正五郎　福岡秀猪

湯本武比古　島田三郎

評議員　伯爵　板垣退助　公爵　二條基弘

伯爵　大隈重信　片岡健吉

辻　新次　公爵　近衛篤磨

東京市神田區一ツ橋帝國教育會

北海道土人救育會

（北海道教育雜誌第九十一號　九十一～九十二頁）

この趣旨書を見ると、アイヌ民族も日本人なのに自由なきとは何ぞ、と問いかけ……、

救育とは単に金品を与えるものではなく、窮境に陥らんとするものを救え、之に自活の途を授けんがために適

切な教育をすること。

又、会則第一条にも、本会の目的をアイヌ民族を救育し、工芸、技術、農事の知識を与え、自営自活の道を教えるにある、と記している。単に同化教育をめざしたものではなく、民族の自立と自活、自由の道を目的としていることが伺われる。

今日の時点からみて、小谷部の文書には時代の子として問題となる言葉がないわけではないが、しかし、一貫してアイヌ民族の人格を重じ、自由と独立の視点をもち続けたように思われる。

一九〇九年（明治四二）二月二日に小谷部は虻田を去る少し前であるが「北海道旧土人保護ニ関スル建議」を国会に出している。これはアメリカのインデァン政策を範としている点も見られて、全面的に賛成できるものではないが、そこには、北海道はアイヌ民族の土地であった。北海道開拓に貢献すること多いのに報いられることが少ないと嘆じ、上川土地問題にふれ、北海道長官自身がその法の精神を踏みにじっていると怒り、アイヌ民族の差別と偏見を問題視して

「アイヌ女子にして邦人の妻となり貞操無比、却って吾の模範たらしむるに足る者あり、邦人婦女にしてアイヌの妻となり蛮風野卑却って彼等の指弾を受くる者あるは吾人の屡目撃する処なり」[24]

と記している。この視点をもって当時アイヌ民族に接した和人がどれだけいたかを考えると、注目に価えする。

小谷部は略歴にあるように、一九〇一年（明治三四）に虻田第二尋常小学校（アイヌ民族の教育所）を設立し翌年、社団法人虻田学園を設立している。一九〇五年（明治三八虻田実業補習学校を設立し、後にここで学んだアイヌ民族出身の著名な教育者・伝道者であった江賀寅三牧師はアイヌ民族の自由と自立を主張した人である。[25]

小谷部は一九〇六年（明治三九）に冬期夜学会を設立して卒業した生徒や虻田学園に入れなかったアイヌ民族の教育を図っている。又、一九〇九年には良友会を組織して機関紙「良友」を発行し、横のつながりをとるなど多様な教育活動を進めたが、健康を害して同年十一月虻田学園を辞し、上京して静養と研究、著述の生涯を送った。辞職する経緯の中には、小谷部の教育方針と道庁の教育方針との相違や地元の人々の誤解、小谷部の性格的一面などもあったようである。

一九四一年、八十四歳で東京品川大井元芝町八四九番地で逝去している。

この虻田学園の教育事業に共鳴して参加した人に白井柳太郎と吉田巌がいる。二人共にアイヌ民族の教育者として知られた人である。旭川の郷土史家村上久吉はアイヌ教育功労者として下記の七名をあげている。

J・バチェラー、小谷部全一郎、白井柳太郎、吉田巌、永久保秀二郎、熊崎直平、佐々木長左ェ門等であるが、[26]この中三名は虻田学園の関係者である。

小谷部の去ったあと、吉田巌が受けつぎ、学園のたてなおしを図ったが、一九一〇年の有珠山の噴火のため被害を受け、ついに閉園せざるを得なかった。

小谷部は在米中、人類学や考古学を学んできたので、帰国してからも学会に加わり研究を続けていた。退職してから出した代表的な書物に『成吉思汗ハ源義経也』一九二四年、と『日本及び日本国民之起原』一九二九年がある。いずれも大著でその博学が知られる。前者は出版されたとき、ベストセラーになるほど世情を騒したが、歴史家より猛烈な反論が出て『中央史壇』二月臨時増刊号が出され、後、雄山閣より『成吉思汗は源義経にあらず』という論争集が出版されたほどである。[27]

小谷部は秋田に生れ、祖母より義経の英雄伝説を聞き、義経は衣川で死なずに蝦夷に渡ったという話に興味をもち続けた。北海道でアイヌ民族に伝わる義経伝説に確信をもって、蝦夷より大陸に渡り蒙古の英雄ジンギスカンになったという仮説をたて、自ら蒙古の地を踏んで遺跡調査をして出したものである。

しかし、この説は必らずしも小谷部の独創ではなく、それまでも、いくつかの説が出されてきた。[28]それを実際に蒙古まで足を運んで実証しようとしたところに小谷部の独自性がある。内容的に史実として受け入れることには困難であるが研究の情熱は一驚に価するものがある。

後者の『日本及び日本国民之起原』は旧約聖書の言と古事記や風土記、神社の縁起、地名、言語、風俗などを照合研究して、日本人の起原はヘブル民族の謎の部族と言われる？ガド族〔申命記三三―二〇―二一、民数記二六―一五、歴代志上五―二六等を引用〕であると推論した奇書である。勿論、現代の聖書学や歴史学では到底受け入れ難い論証であるが、これほど美事な自己目的論的聖書解釈をした書物も珍しい。渡辺善太師の聖書解釈論からすれば、意図的強釈（Einlegung-Eisegesis）[29]とでも言われるものであろうか。

けれども、あの極右的国粋主義の高まりの中で、このような本が出されて一九三三年迄に八版を重ねることが

出来たのは不思議でならない。

しかし、筆者の関心はその著書の内容であるよりも、著者の信仰、思想の問題である。何故に、留学してハワード大学で神学を学びエール大学で哲学、神学を学んで按手礼まで受けた著者が信仰的、思想的変容をしていったのかである。武田清子氏の類型によれば、妥協の埋没型と言われる典型的なタイプであろう。(30)

小谷部がアメリカで学んでいた一八九〇年代は、おおまかに言って、ヨーロッパではリッチェル学派の全盛時代で、アメリカではラウシェンブッシュらの社会的福音(Social gospel)が勃興しつつあった時代である。教会は第三覚醒期と言われ黒人教会やインデァン伝道(Indian Mission Conference)が盛んに行われた時代である。

日本では一九〇〇年代は二十世紀大挙伝道が教超派で行われ、一方においては私立学校令など宗教教育の困難となる時代でもあった。

彼の信仰思想的変容は彼自身の生立ちや、性格とも深く関わっていると思われる。学問的思想的孤独感、教会的信仰的孤立感などを経験して歩ゆんでいる。

小谷部が北海道にきたときはすでに組合教会が教派として道内の伝道をしていたが、その交わりは見られない。又、小谷部の資料にも彼自身が所属したコングリゲーショナル・チャーチは、札幌バンドを生んだW・S・クラークも、同志社の創立者、新島襄も所属した教派だが、彼の著書にはその名を見出すことがない。

彼の思想は明治のキリスト者の中でみられた。国粋的愛国心を内に秘めて聖書を読んだ一人のキリスト者であったことであろう。アイヌ民族の教育についてもその枠を越えることは出来なかったが、本心から願っていたのは、差別の中に在ったアイヌ民族の人格を重んじ、自由と独立の精神を涵養することにあったのである。

晩年はキリスト教から離れて神道に傾斜し、シンクレテシズムになったが、彼自身の理解した神学と教会観の微弱さに問題があったように思われる。それは明治期における福音受容の問題として別に再考せられるべき課題であろう。

註

(1) 工藤英一〔社会経済史視角より見たる赤心社の北海道開拓とキリスト教—明治学院論叢第四六号〕
富田四郎〔会社組織に依る北海道開拓の研究—一九二七〕
榎本守恵〔キリスト教と北海道開拓—日本社会史論集一九六五〕

金田隆一〔キリスト教よりみた北海道開拓精神について〕苫小牧高専紀要、一九六六。
高倉新一郎〔北海道開拓史〕、柏葉書院、一九四七。
北海道キリスト教史料調査会。

(2) Arnold J. Toynbee〔東から西へ—世界一周旅行記〕、六六—七四頁。
黒沢英二訳、毎日新聞社刊、一九五九年。

(3) Frederick J. Turner〔アメリカ古典文庫—九〕、研究社、一九七五年、西崎京子訳、三九頁。

(4) 右同書、四〇頁。

(5) 右同書、四二頁。

(6) 右同書、四三頁。

(7) 右同書、八六頁。

(8) 右同書、六五頁。

(9) 右同書、七〇頁。

※ F. J. Turner の論文は札幌在住時代アメリカ文化センターから借りて見たが、今手もとにないので研究社刊より引用した。

(10) 福島著〔北海道キリスト教史〕、教団出版局刊、一九八二年参照。

(11) 永田方正（一八四四—一九一一）、「北海道蝦夷語地名解」の著者。スミス女学校、遺愛女学校の講師をする。日本人で最初に聖書翻訳「西洋教草」一八七三年に出す。

(12) 永久保秀二郎（一八四九—一九二四）、ミスペイン（L. Payne）と共に釧路の春採アイヌ学校の教育をする。

(13) 三浦政治（一八八〇—一九六二）、永久保秀二郎のあとを受けて春採のアイヌ学校で教育をする。

(14) 〔紅葉坂教会八十年史〕、一七頁、一九七三年。

(15) 〔北海道教育雑誌〕、第八三号、一〇〇頁、一八九九年。

(16) 〔北海道教育史—全道編三〕、北海道教育研究所、第九初等教育、二項は旧土人教育—付二一九六三年虻田の旧土人教育として、三〇三—三二八頁に記されている。

(17) 右同、三二八頁。

(18) 帯広市社会教育叢書、No. 6. 一九六〇年、吉田巌著「愛郷春秋」虻田学園をめぐりて、四〇頁。

(19) 〔新北海道史第四巻〕、〔北海道私学教育史〕、〔北海道大百科事典〕、その他の虻田学園の項に小谷部全一郎がキリスト者であることは触れられていない。

(20) 虻田町史、八三八頁、一九六二年。

(21) 小谷部全一郎の略歴はいくつかの文献にあるが、かなりの違いがあるので小谷部の自著を基礎として筆者が作成。

(22) ㉒金田一京助著「北の人」—英雄不死伝説の見地から—一五八—一八〇頁。

(23) 高倉新一郎著「アイヌ政策史」六〇八～六〇九頁、一九四二年、日本評論社刊。

(24) 「北海道教育第一九四号」、四頁、一九〇九年。

(25) 森山論著「アイヌ教育家、牧師、江賀寅三伝—戦うコタンの勇者」。

(26) 村上久吉著「あいぬ人物伝」平凡社刊、一九四二年。

(27) 「成吉思汗は源義経にあらず」、雄山閣刊、一九二五年。

中島利一郎、三宅雪嶺、鳥居龍蔵ら十八名の反論集。

(28) 義経ジンギスカン説は、水戸藩編「大日本史」の中に（世代義経不死於衣川館進至蝦夷）との生存説があり、シーボルトの「日本誌」に源義経は成吉思汗と同一人物ではないかと書かれて居り。一八七九年、英国のケンブリッジ大学に留学した末松謙澄が卒論で（Identity of the Great Conqueror Genghis Khan With the Japanese Hero Yoshitune）を書いている。小谷部はこの論文に示唆されたようである。

(29) (29)渡辺善太全集六「聖書解釈論」三六四頁、キリスト新聞社刊、一九六六年。

(30) 武田清子著「土着と背教」五―二三頁、新教出版社刊、一九六七年。

※ 本研究をまとめるために北海道教育大学旭川分校の図書館、旭川市立図書館札幌市立図書館道立図書館及び紅葉坂教会岸本羊一牧師、福島義人伝道師に世話になったことを心から感謝したい。